

1970年、大阪万博に始まった日本の原子力時代もようやく終わりの始まりを迎えつつある。原発はいずれ寿命を迎えるが、新たな原発を作っていくという機運は世界的にももうない。徒勞に終わる核燃料サイクルの夢を追いつづけているのは世界でも日本ぐらいのものだ。その間にも、廃炉と放射性廃棄物は増えその後始末に今後膨大なお金と労力が必要となる。こうした廃炉で膨大な放射性廃棄物の処理費用を安上がりにするために政府は極低レベルの放射性廃棄物の「スロキリ処分」という新たな対策を目指している。それは放射能を放射能でないとはいくめ、事実上私たちの生活環境にばら撒くものだ。原子力の最後のつけは結局私たちが払うことになるのだろうか。

廃炉で出る放射能

原発は30~40年間の運転中、炉心で燃える核燃料から出る中性子で炉材が放射化されたり、燃料が燃えて出来る放射性廃棄物で汚染したりで、炉材が放射能で汚染される。これらは廃炉になれば全て放射性廃棄物となる。一例を挙げれば、平均的な100万Kwの原発が廃炉になれば、約200000m³（50万トン）もの鉄材や廃コンクリートが放射性廃棄物となる。53基ある日本の原発が全て廃炉になれば、600万m³という途方もない量の廃棄物が出る。これをまともに放射性廃棄物として処分すれば、1基の原発で6000億円はかかると計算されている。原発の建設費は2000~3000億円だから、廃炉にはその倍以上の費用がかかることになる。こんなことは、原発建設当時は誰にも知らされなかったのである。この費用をまともに電気代に含めれば、原発の経済性は全くなくなることは明らかである。その上に、燃え滓の核燃料廃棄物の処分費用が重なる。

放射能を普通ごみにする「クリアランスレベル」

そこで考えられているのが、これらの大量の放射性廃棄物を一般ごみとして処分してかまわない、とする「クリアランスレベルの設定」である。即ち、ごくレベルの低い放射性廃棄物は放射性廃棄物とせず普通のごみとして捨ててしまう。そのために、基準を決めようというのである。普通ごみとなれば、コンクリートは公園や海岸の埋め立てに使ったり、鉄材は製鉄所に送って鍋や食器、机などの原料にしてかまわないことになる。これは放射性廃棄物とし

てお金をかけて処分するものとそうでない物を分ける、いわゆる「スロキリ」である。実は廃炉放射性廃棄物50万トンの98~99%はこうした、基準以下の一般ごみになると推定されている。それによって、廃炉費用は20分の1の300億円程度に圧縮される。原発の電気代が火力発電と肩を並べていられるのは放射能を「放射能でない」とする詭弁に基づいているのである。

「スロキリ」の実際はどうなる？

スロキリの基準レベルは、人間の被曝が自然放射線による被曝と比べて、有意に高くないレベル、とされる。これが曲者である。この考えの基本にあるのは外部被曝による障害である。そのため、H3（トリチウム）やC14（炭素14）のようなベータ線廃棄物は大幅に基準がゆるくなる。例えばH3を例にとれば、200ベクレル/gという高いレベルが基準になる。こんなレベルのH3を含む物質は自然界に存在しない。自然界のH3は過去の核実験の影響で海水が最も多いが、それでも0.001~0.002ベクレル/g程度である。即ち政府のいう安全レベルは自然界の10~20万倍になる。スクラップとして処理される鉄の基準は、ガンマ線を出すFe55（鉄55：半減期2.7年）やNi59（ニッケル59：半減期100年）で10000ベクレル/gになる可能性がある。このようなものが私たちの生活の中に侵入してくることになる。廃炉の時代は私たちにとって新たな放射能との戦いの時代でもある。放射能のスロキリを許してはならない。（河田）